

第1回植栽樹木検討専門委員会 議事録

平成 22 年 7 月 22 日
13 時 40 分～15 時 30 分

1 開会

<大北事務局次長>

2 あいさつ

<清水事務局長>

- ・平成 25 年度に鳥取県において「第 6 4 回全国植樹祭」が開催されることが内定。8 月 26 日は本決定になることになった。秋ごろには式典の開催場所が決定される予定。
- ・全国植樹祭の万全な受け入れのため、6 月 28 日に「全国植樹祭鳥取県実行委員会」を設立。
- ・開催候補地は、式典会場が「とっとり花回廊」、植樹会場が「鏡ヶ成」と「とっとり花回廊」に決定したところ、また、皇室のお手植・お手播用の樹種を決定するための、今日開催させていただいた「専門委員会」の設置が決定したところ。
- ・皇室のお手植・お手播用の樹種を決めるに当たっては、樹種選定方針等について、実行委員会において、生物の多様性への配慮や、遺伝子攪乱の防止等というような意見が出ている。選定に当たっては、このような意見を参考にさせていただきたい。
- ・苗木の養成は、種子の採取も含めまして、2 年間程度の期間を要するというので、種の採取は、今年の秋ごろから対応が必要だということもあり、樹種選定は、8 月末ごろまでには結果を出していただくようお願いしたい。

<事務局次長>

委員紹介

資料の確認

議長選出

会則に基づいて佐野委員長を議長に任命

【議事】

3 全国植樹祭の概要 資料 1 説明

4 植栽樹木検討専門委員会 資料 2 説明

質疑

<山本委員>

- ・せっかくの機会なので、小学校単位で苗木を育成してもらい、植樹祭で使用するというようなことも考えてほしい。

<事務局>

- ・県民に植樹祭へ広く参加いただくため、提案の様な形で、自分たちもこの苗木を大きくしたのだと、小学生にも体験してもらったり、小学生でなくとも、広がりのある取り組みをしてみたいと考えている

【議事】

5 植樹方針素案 資料3～5説明

質疑

<藤原委員>

- ・植樹会場面積は、どの程度と考えているのか。

<事務局>

- ・植樹に利用できる面積は、鏡ヶ成周辺で約1ヘクタール。花回廊は、30ヘクタール。内3～4ヘクタールは植樹会場として必要なのではないかと想定。参加者数が5千人と想定。内植栽参加者を、3千名程度として、一人あたりが1本植栽なら全部で3千本で1ヘクタール。2本なら6千本で2ヘクタール。3本なら9千本で3ヘクタールとなる。
- ・会場用地のすべて木を切って、植栽するわけではない。植栽しない部分も出てくる。現地確認の上、確定する。

<藤原委員>

- ・福井県の植樹祭では、後始末の必要がない生分解性ポットを使用したと聞いている。鳥取県でも使用してもらいたい。
- ・子供たちにも苗木を育成してもらうためには、夏場の枯れ対策のため、ポット径を大きめとして、12cm～15cmの大きさとしてもらいたい。

<吉岡委員>

- ・選定する苗木は、高度差があるため2会場で別個な樹種となる。その位置や高度に出現しないものは植えるべきではない。
- ・我々の会（大山横手道ブナを植える会）は、以前植えたブナの苗木を所有している。これが植栽用に使える。ミズナラは、ほとんど毎年採種できるので、心配はない。
- ・鏡ヶ成の植栽予定地は南側斜面。ブナよりはミズナラの適地。
- ・鏡ヶ成周辺の植栽適正樹種（資料4）、「ウリハダカエデ」であるとか「ミズキ」について考えると、近辺の群落から、幼木が植栽予定地に沢山侵入していると思う。そのような幼木は、いずれは、ブナやミズナラが優勢になるが、共存させながら、競争させる。それが、国立公園内や国有林内で、植樹を進めるときの基本ではないかと考える。侵入した樹木は、なるべく残して、足りないものを選定し植栽するべきだ。

<藤原委員>

- ・ミズナラは、鏡ヶ成オートキャンプ場周辺に沢山植えてあるものから採種可能。ウリハダカエデも標高が高い所でどこにでも種が採れる。

<佐野委員長>

- ・植栽方針（素案）5と7によれば、苗高1.5～1.0mもの苗木が必要となる。今から種を取って作るのはかなり難しい。調達方法の検討が必要。
- ・植栽方針（素案）6によれば、お手播き用樹種は、式典会場でお手播きいただいたものを、県内各地に配る仕組み。これだと配布された苗木が遺伝子攪乱を起こす可能性もある。採種地域と苗木の配布地域を一致させる仕組みが必要。
- ・今から種を取って、25年の植樹祭までに、十分大きくなるものは、なるべく子供たちに育ててもらい、その指導を鳥取県山林樹苗協同組合にお願いすることもある。

<事務局>

- ・遺伝子攪乱を起こさない苗木の配布範囲は、例えば「東・中・西部」の様な仕分けか。

<佐野委員長>

- ・最低その程度の範囲での仕分けが必要。
- ・ブナのように、遺伝的組成が分かっているものは、その分布に従った配布を行うべき。

<吉岡委員>

- ・鏡ヶ成で、例えばハナイカダ・ウツギ等、低木を植栽候補木とすれば、皆、自生しているため、刈り込むことができなくなる。したがってここには、ミズナラや、イタヤカエデを繁殖させる等、鏡ヶ成周辺の樹種で高木性のものを中心に植栽し、いくらかクロモジの様な低木を残す等の森林整備をするべき。

<佐野委員長>

- ・自然状態で更新している所はそのままにして、自然でないところ、荒れ地になっている所・木が生えないような所に植栽しようというのが基本方針（素案）4。現場写真を見ると、かなり森林が更新しているように見える。今後遷移すると、何十年、何百年すると高木も入ってくる。実際場所を見てみないとわからないが、写真で見る限りは、もっと適当な場所は無いかなと思う。次回、現地調査の際確認する。低木ばかりで高木は更新できない状態であれば、手を入れてやる必要も生じてくる。

<藤原委員>

- ・鏡ヶ成は標高800m、花回廊は150m。高度差があるので、トータルすれば、かなりの多くの樹種が植栽適地となる。鏡ヶ成の方は樹種はあまり多くしないほうが良いか。標高の高いところはあまり樹種を増やしたら、かえって生態系に影響する。

<池本委員>

- ・学校教育の場にするとか、薬用樹の参考林にするとか、植樹後の利用計画は何かあるか。植えた木をずっと保護管理していくということでもないのか。最終的には自然の山と同じような林層になるということか。

<塩永委員代理 鳥取森林管理署・小森次長>

- ・今回の植栽イベントでは、植樹会場を公園とか標本、樹木園という形態で残すのであれば、今の生育環境を崩して、将来的な形を見据えた上で、どこまで許容できるか、というところも検討課題の一つ。鏡ヶ成のように、10数年放置されて、自然治癒力・回復力をもって、ウツギとかサワグルミ、自然種が出てきている所でもあるから、そこをどう割り切っていくか。将来の形を見据えた上で、人間がどれだけ手をかけてやるか。その中には、恐らく消失してしまう樹種もあっても仕方がない、というところの割り切りがなければ、樹種選定は難しい。

<佐野委員長>

- ・元の自生種を切って公園を作るというのが結構ある。それは避けたい。

<吉岡委員>

- ・花回廊は、鏡ヶ成より樹種選定が難しい。木を植えて将来何をするか。高度が低い山が放置されると、ツルで塞がれて、自分の植えたものがどこにあるのかわからなくなるのは目に見えている。色々な樹種をばらばらに植えたところで雑木林では何も利用できない。里山なのだから里山をどういう風に利用するのかというものの考え方でそこは考えるべき。

<上原委員>

- ・多額の費用で植樹祭を実施して、多くの樹木が植えられても、それを県がずっと管理してもらえるのか。折角そこに植えたのなら「これは植樹祭の時に植えた」という看板を付けて、きちんと管理をして「あなたが植えた木がこんなに大きくなった」といえるような場所になれば、一番良いと思う。

<佐野委員長>

- ・植樹後の森林管理が一番大事な問題と認識。先催県はどうしているのか。

<事務局>

- ・植樹祭が行われた山として管理している。近年遡って調べたが、どこの県も「〇〇の森」と命名し県や市町村管理している。
- ・例えば福井の場合は、作業道や遊歩道が入っている。

<藤原委員>

- ・鳥取もそのようにして欲しい

<山本委員長>

- ・植栽方針（素案）5には、「高木で長寿種等とする」とある。この様な管理にはお金がかかる。現状では一番最初に樹木管理への予算が削減される流れ。維持管理の面についても是非考慮して欲しいと思う。
- ・長寿種というのは、優良樹種は200年以上のもの。鳥取県の名木100選の中にある木でも、スギでもヒノキでも、共通認識としてあるのは、200年、300年。

<佐野委員長>

- ・植樹後どう森林を管理するのか視野に入れた山づくり案を作って欲しい。

6 その他

第2回植栽樹木検討専門委員会は、8月10日（火）に開催。とっとり花回廊等植樹候補地の現地視察と植樹方針案の検討、植樹用樹種の候補案の検討を1日の工程で実施予定。